ゆずりは通信

第７号　平成２１ 年１１月３日（隔月発行）
発行：ゆずりはの会事務局
電話：0565-35-7182
Ｅ－ﾒｰﾙ：takekaki@hm8.aitai.ne.jp
ホームページ；
http://www.hm9.aitai.ne.jp/~warabino/

ゆずりはの会　の次の活動候補として、「エンディングノート」の学習と作成が提案されています。「今までの人生を振り返り、今を見つめ、終りまでをどう生きるか、終りをどのように締めくくるか」を、自らデザインしようとする試みといって良いでしょう。
このテーマに関連した課題について、僧侶が発言した本を読みました。違った観点からの提案です。参考になればと思い概要を紹介します。

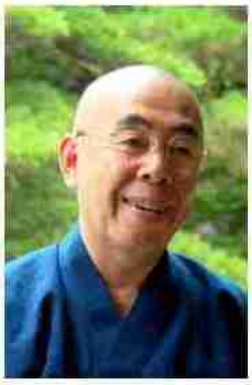
「寺よ、変われ」　岩波新書

1. 概要

日本の寺は、いまや死にかけている。形骸化した葬儀・法事のあり方を改めるだけでなく、さまざまな「苦」を抱えて生きる人々を支える拠点となるべきではないか。「いのち」と向き合って幅広い社会活動や文化行事を重ね、地域の高齢者福祉の場づくりにも努めてきた僧侶が、その実践を語り、コンビニの倍、八万余もある寺の変革を訴える。

2. 著者　:高橋　卓志氏の略歴

1948 年、長野県に生まれる。龍谷大学文学部卒、
同大学院東洋史学科中退。
海清寺(兵庫県西宮市)専門道場で禅修行の後。
1976 年、醫王山神宮寺(臨済宗、長野県松本市)副住職。
1990 年、同住職。
現在、　長野県 NPO センター代表、ケアタウン浅間温泉
代表理事、龍谷大学社会学部
客員教授、東京大学大学院講師なども務める


著者　高橋卓志

＜本文からの抜粋＞

1. 仏教の変質は

社会の変化の中で、坊さんが世襲制になったことが、寺の質を低下させた。
寺という「家庭」で僧侶の父とその妻（母）との間に生を受ける。そして多くの寺の子達は「世襲」するために仏教系の大学に進む。宗門立の大学に進む場合が多い。そこでは宗旨に基づいた専門教育を受ける。しかし彼らの中に、真剣に坊さんになるために仏教を理解しようという意欲を持つ者は少ない。寺を世襲するための条件として大学に在籍する。

以前には、寺に何人もの弟子がいて、その中から次代の住職が決められていた。家庭の事情により、食い扶ちを減らすため小僧に出され、何人もの弟子とともに、他人である住職夫妻から厳しい躾を受けながら成長する仕組みがあった。そこには住職になるための競争意識とともに、それを成就するための真摯な信仰と学びへの強い意欲があった。現代の世襲による坊さんの多くは、自分自身が釈尊の教えの理解や、修行という追体験も十分ではなく、社会にあふれる「苦」を見ることもなく、ただいくつかの経が誦めるというだけで、葬儀や法事を執り行なっている。

2. 葬式仏教へ

古来より仏教は、人々が抱える現実の「苦」や「悲」や「痛」「にかかわり、それらを緩和・緩衝する方策や力を保持していた。「苦」から抜け出たいという切実な願いを持つ人々は、その「苦」を救う巨大な思想と哲学を含んだ仏教を深く信仰の対象とし、それらを具現する寺や坊さんに信頼を寄せてきたのである。

今は、葬式仏教と呼ばれる。葬式と年忌など金の儲かる儀式を、仏教はほぼ独占し、それに安住してきた。さらに近年は事態が変化している。1999 年には、葬儀の 62%が自宅か寺で行われ、30%が葬儀場で行われていた。2007 年には、反転し、28％が自宅か寺で、61％が葬儀場で行われている。今では、葬儀場が主役となって坊さんは脇役となってきている。加えて、一切葬儀を行わず、直葬（火葬）する日本人が増えている。

3. 著者の目覚め

世間の他の坊さんと同じ環境に育ち、世襲制で住職になった著者が、目覚めたきっかけとなったいくつかの体験があった。

1）戦地への慰霊行に同行して

臨済宗本山妙心寺の管長であった山田無文老師の指示で、ニューギニア諸島の一つ：ビアク島を遺族と共に訪れた。兵士の遺骨が重なる洞窟の中で、「経を読め」と言われて、読めなかった。遺族の号泣を聞きながら、命の最期におののき、死の重量感に圧倒された。今まで自分は死後のセレモニーとしてしか死者たちに向かいあってこなかった、ことを恥じた。

日本兵が玉砕したビアク島の洞窟

2） チェルノブイリ放射能汚染地域の病院で。

ウクライナ共和国の首都にある小児病院で、白血病で死にかけている子供の母親から、「ここではこの子は助かりません。日本へ連れて行って、この命を救ってください」と懇願されたが、なすすべがなかった。

3)　タイのエイズホスピスで

大乗仏教の僧侶が運営している「エイズホスピス（実際は寺）」に、エイズに感染したために、家族の手で放り込まれた女性が、「Wanna live」と訴えたが、何も出来なかった。

4)　ターミナルケアにおける宗教家の役割は

「スピリチュアルな苦痛に宗教は対応できているか」を調査するために、著者は、イギリスやアイルランドに行った。イギリスのホスピスで、「宗教者のかかわりは必要ない」と言われた。

スピリチュアルな痛みの前に、患者の身体的・社会的状況を整える必要があること。この様な場合、がん専門のスペシャル・ナースが対応し、総合的な痛みの緩和治療の中でスピリチュアルな問題も解決している。

4. 神宮寺が社会との関わり増やすために行ったこと

1）尋常浅間学校

1997 年に開校した。永六輔さんが校長で、無着成恭さんが教頭だった。10 年間に 100 回の授業を行った。授業ばかりでなく、シンポジウム、コンサート、修学旅行なども行なった。

神宮寺

2）お盆の施餓鬼法要に、色々なイベント。

例えば、モンゴルのチベット仏教の僧たち 8 人を招いて声明を唱えてもらい、観音経を重ね合わせた。

3）相談事の引き受け。

相談に来る誰もが、苦境や悲嘆や迷いから抜け出そうとしてくる。相談は、生老病死全般にわたり、しかも際限なく多彩に入り込み続ける。だから相談対応のマニュアルなどが、あったとしても役に立たない。自分自身の体験と、感性と、有効な人的ネットワークが頼りだ。

4）葬儀を取り巻く環境の変化に対応

菩提寺を持つ人々が葬儀を菩提寺に依頼しない現象が起きている。リビングウイルの広がりが、葬儀を変える。神宮寺では、一人ひとりに対するオーダーメイドの葬儀を行っている。

5)　ケアタウン浅間温泉

浅間温泉の老舗旅館「御殿の湯」が廃業した後を借り受け、地元の関係者と協力して地域総合ケアの基地にした。

小規模多機能サービスの拠点であり、通所介護、訪問介護・看護、ショートステイ、グループホームなどの機能を併せ持つ。

浅間温泉　御殿の湯

デイサービス

また一貫したケアシステムを作動させるべく、
NPO 法人「ライフデザインセンター」を立ち上げた。
ここでは「旅立ちデザインノート」を発行している。
このノートは、74 ページにわたる解説書とセットで
作成された。ノートには、自分史、別れの手紙、
相続・遺言、マイカルテ、リビングウイル、
葬儀について記載するようになっている。
（この 2 冊を購入しました、手元にあります）。

著者が関わったノート

5. 著者の考え

1)コミュニティケア。

「ケア」とは、その人が、その人らしく、その人の尊厳が守られるために支援することである。もし身体や精神に不都合や不具合が発生し、それによって今まで生きてきた日常に、不便や不足を生じた場合、あるいはそれによって生活の質が低下した場合、それを補うため、その人に必要なことを支援することを「ケア」という。浅間地域では、こうした考えの下に、NPO などと活動を行っている。

2）「寺とは何をする場所か」「坊さんとは何をする人か」
との問いに対する、著者の答え。

社会に起きている、起きようとしているさまざまな「いのち」にかかわる難問（四苦＝生・病・老・死）にアクセスする。そしてその難問に対して、支えの本性（利他心）を発動させ、四苦に寄り添いながら、課題の解決を図ってゆくのが坊さんであり、その拠点が寺である。

＜共働事業　市民講座＞

高齢福祉課、社会福祉協議会との共働事業である
市民講座は、10 月 13 日に公式行事を終えました。
受講者の希望もあり、追加の集まりを、11 月 10 日（火）に　開催
します。講座のまとめは別途通信で紹介したいと思います。